



琉大と首里城

～ 過去編 ～

琉大の幕開けは、首里城から。

1951年2月12日 開学記念式典の様子

西田：ちょうど今年琉大は創設70周年。沖縄戦にて焼失した後、沖縄に本格的な大学を建てるにあたり、場所をどこにするかという議論も随分されたと思うのですが、それが沖縄戦にて焼失した首里城の跡地だったということに個人的に凄いことだと思うのです。大学本部は正殿のあったところに置かれ、デザインも首里城を意識して作られました。そのことに県民の多くの方が『戦後の復興はまずは人材育成から』と考えていたことが現れていると改めて思った訳です。実際に狩俣先生が学生として通われていた頃は、どの様に過ごされたのでしょうか？

狩俣：まず当時の琉大には正門がなく、守礼の門が正門みたいなものでした。正殿跡の本部棟に向かって南殿側が法文学部と教育学部で、北殿側が理学部、その手前に図書館がありました。今の守礼の門の右横には農学部、守礼の門の手前に工学部がありました。本部棟の前には駐車場があり、その真ん中には鉄板。開けると井戸がありました。丘の上なのにこんこんと水が湧いていて、かつて生活用水として使われていたであろう井戸は、ここに確かに首里城があったのだと分かる数少ない場所でした。今の龍樋があるところの階段は1段が大きく、普通に登ると右足だけで登ることになるので、1・2・3、1・2・3のリズムで登るワルツ坂と呼んでいました。首里は狭いキャンパスだったので、他の学部の学生と交流し易かったですね。

西田：私が赴任したのは1980年で、ちょうど西原キャンパスが出来始めた頃。首里キャンパスと行ったり来たりしていたのですが、首里キャンパスは緑が鬱蒼とした印象で、西原は赤土だらけ。ここが首里キャンパスのように落ち着いたキャンパスになるのだろうかと思ったのですが、それから40年経った今は緑に溢れていますね。時間が経つこうなるのですね。

戦後焼け野原で何もなくなった首里城跡が緑に溢れたキャンパスになり、赤土だらけだったこの西原キャンパスも今はこんなに緑に溢れている。沖縄の自然の再生能力の高さを感じます。

狩俣：70年前、多くの方の力を借り、首里城跡に沖縄群島の最高学府として琉大は出来ました。沖縄の叡智の塊があったところに、戦後の沖縄の復興を担う人材を作る場所として誕生した琉球大学。そういった建学の歴史があるということをも今の学生に伝えるということも必要だと思えます。場所は変わったけど、精神は昔のままだという意思の現れとして首里キャンパスにあった樹木を移植して首里の杜を造ったり、寮の名前を引き継いだりしたのだと思います。※

※今でも学生寮の一部の棟は、かつての南星棟、海邦棟、北辰棟の名前を受け継いでいる。

西田 睦

Nishida Mutsumi

学長

【専門分野】

海洋生物学、分子進化生物学

狩俣 繁久

Karimata Shigehisa

名誉教授

島嶼地域科学研究所 客員研究員

【専門分野】

日本語学

言語学